白金の丘に根深く…

2009年は、賀川豊彦が神戸新川のスラム街に住み込んで伝道生活を始めてからちょうど100年目にあたる記念すべき年であった。その献身的な体験を下敷きにして書かれ、大正９年（1920年）に出版されてベストセラーとなった自伝的小説『死線を越えて』も100周年にあわせて復刻された（PHP 研究所、2009年４月刊）。この小説の主人公が学ぶ明治学院での生活が描かれている冒頭部分は、次のような文章で始まる。

> 東京芝白金の近郊に谷峡が三つ寄った所がある。そこは、あちらもこちらも滴る許りの緑翠で飾られているので唯谷間の湿っぽい去年の稲の株がまだ覆されていない田圃だけに緑がない。
>
> 大崎の方に寄った谷の奥には大きな雲の上に出る様な大杉が幾十本となしに生えている。そこは池田侯爵の屋敷である。白金の岡にはお寺が一軒二軒、中の岡には屋敷も無ければ寺もない。細い栗、楢、櫟が三十本六十本と生えている。

賀川は1905年に明治学院に入学しているので、ここに描写された風景は、その頃の記憶をもとにして書かれていると推測される。現在の明治学院大学本館７階の窓から周辺の風景をぐるりと見渡して、それからこの描写をもう一度読んでみる。いかに歴史的想像力が貧困な私といえども、ひとつの場所の物理的・社会的な変貌の背後にある１世紀という時間の流れの水圧が網膜に痛いほど襲いかかるのを感じないわけにはいかない。「滴る許りの緑翠」や「谷間の湿っぽい…田圃」や「幾十本となしに生えている」「大杉」などがフラッシュバック映像のように浮かんでは消える。しかし、個々の映像を特定の場所に正確に位置づけることは不可能である。「大きな雲の上に出るような大杉」は、白い雲を映すガラスに覆われた高層ビルに姿を変えてしまった。

私が本学に赴任してからの10年間に限っても、大学周辺のいくつもの古い家屋や商店が忽然と消滅し、圧倒的な高度と硬度を誇るマンションが林立するようになった。新しい地下鉄の駅が開通して、しゃれたレストランが開店した。いわば「シロガネーゼ」的空間が浸食を拡大したのだが、それは賀川が見た風景の痕跡を風化させる長期過程に含まれる無数の波のうちのひとつにすぎない。

これまでの私は、日々何に追われていたのかわからないが、職場であるこの白金の丘の周辺に眼を向ける余裕がなかった。マスメディアが作りあげた「シロガネーゼ」の街というイメージが定着した白金や白金台の地、あるいは港区という都心地域に、光を当てその内実はどうなのかと問うこともなく、うかうかと時を過ごしてきた。しかし、昨年度より久々に社会学部付属研究所に関わるようになり、港区との連携の下に地域の子育て支援活動の実績を積んできた相談・研究部門の実践活動にも刺激されて、港区の現在の実像が少しずつ焦点を結び始めた。

一方、調査・研究部門では、2010年度からの特別推進プロジェクト「現代日本の地域社会における〈つながり〉の位相――新しい協働システムの構築にむけて」の立ち上げを目指して準備を進め

てきた。2009年11月末にはその一環として明学周辺を含む港区内のいくつかの地区を「フィールド・トリップ」するイベントも企画され、私もそれに参加させていただいた。地元に詳しい方にまちの隅々を、文字通り路地裏まで案内していただいたことで、港区がいかに異質な空間がモザイク状に隣接している場所なのかを再認識することができた。

かつての倉庫街から未来都市的高層住宅群へと変貌著しいウォーターフロントの芝浦港南地区（再開発された品川駅周辺地区の向こう側）では、子どもの数が急増し、保育・教育・子育て支援施設の建て替えが次々と進行している。一方、明学の周辺には、閑静な一戸建て住宅街もあるが、そこからほんの少し歩くと、今でも下町的な雰囲気を存分に残す商店街や住宅街に足を踏み入れることができる。実際、明学から徒歩３分ほどの通り沿いでも、精密螺子（ねじ）を製造する小さな町工場の控えめな機械音を耳にする。おそらく少なくとも20年ほどを遡れば、明学に隣接する地域が近代化とともに隆盛した「下町」、つまり多様な自営業のまちであったと推定される。よく見れば明治学院は、この狭い地域のなかの、山の手的空間と下町的空間に挟まれた場所に建っている。そして、その周辺の所々に、まさに雨後の竹の子のように真新しい高層マンションがそびえ立っているのである。

古き良き地域コミュニティが失われつつあると、後ろ向きの感傷に浸ろうというのでは無論ない。事実、当研究所が関わっている地域の子育て支援実践を含めて、この都心地域には行政および民間による多様なネットワーク形成の動きが活発だ。古くからの住民も、新しい住民も、そして住民ではない（私のような人間を含む）多様な人たちも、新しい絆を作ったり、古い絆を温めたりしながら、何らかのプロジェクトに関わっている場所――それこそが都心のコミュニティではないだろうか。しかし、そこで何が起こっているのかを正確に知るためには、もう少ししっかりと眼を凝らして見る必要がありそうだ。

この白金の丘を拠点に研究・実践活動を続けてきた本研究所の機関誌『研究所年報』も、第40号という記念すべき節目を迎えた。その意味で私たちは、ここに深く根を下ろしていると言える。しかし、根を下ろしている場所がどのような場所なのか、本当に根を下ろしていると言っていいのかどうか、振り返ってみるべきときが来ているのかもしれない。

2009年12月

社会学部付属研究所所長　**野沢　慎司**